

第 1 章 21 世紀社会における若者の変容

シチズンシップ共育企画

代表 川中 大輔

1. 社会の変容と若者の変容の相関

1-1. 青少年支援者が社会の変容を見極める必要性

「青少年が変わった。」と言われる。そうした語りの大半は喪失のレトリックで、ある種の嘆きや憤りの念が込められている。しかし、社会が変動し続ける中、その社会構造の中に生きる青少年が変わることは当然のことであり、「変化」を所与のものとして、われわれは受け止める必要がある。青少年支援（ユースワーク）に従事するものにとって重要なことは、現代社会においてどのような変容が進行し、その変容を受けて若者がどのように変容してきているのかを見極め、ユースワークの方法を変えていくことである。本章の目的は、社会の変容／若者の変容について概観しながら、ユースワークの方法をどのように変えていくべきかを論じる前提条件を整えることにある。

なお、次章以降では、野外活動における青少年育成がどのような変遷を経ているのかを確認し、現在の主たる野外活動の何がどのように現代社会の変容に対応しきれていないのかを明らかとしていく。そして、今後どのようなユースワークを行うべきかを提起することとなる。

1-2. 「霧の中の時代」としての現代社会

リオタール（1986）は、近代社会を支えた大きな価値観が失効していくポスト・モダンの動きを「大きな物語」の凋落と表現した。この「大きな物語」の凋落によって、人々の未来社会の発展への信頼は揺らいでいくこととなる。社会の発展を規定する（と思われていた）ものが何であるのかが不確かになった結果、社会の先行きを見通すことは困難となっていくこととなる。こうした不透明化の強まった現代社会をエスピン・アンデルセンは「霧の中の時代」と呼んでいる（広田, 2008b）。社会が激しく変化していることは確かに分かるが、その変化の方向性が霧の中であるということを指している。

現代の若者はこうした変動を察知していないわけではない。寧ろ、斎藤（2008）が述べている通り、「先」が見えていないからではなく、「先」が見えすぎているが故に、社会に踏み出せないでいると言える。ここでいう「先」とは、具体的な社会の未来像を指しているのではなく、社会の先行きが不透明であるということ自体を指していると考えらるべきであろう。「霧の中の時代」に生きているという自覚的／無自覚的な認識が、生きる不安を強くしている。そして、その不安への反動や結果として様々な若者の変化を私たちは見て取れることができる。

本稿では、現代社会の変容について、より踏み込んで論及するにあたり、1980 年代以降の社会構造の大きな変動として「成熟社会への移行」「雇用システムの変化」「教育における新自由主義の展開」

という3つに注目し、どのような社会環境が若者を取り巻いているのかを明らかとしていくこととする。

2. 「新たな競争」を生きる若者たち

2-1. 成長社会から成熟社会への移行

1970年代に戦後日本社会が追求した物質的な豊かさが実現し、日本社会は「成長社会」から「成熟社会」への移行を辿ることになる(宮台, 2000)。成長社会の時には、この物質的に豊かになるという分ちもたれた「社会の発展」の目標は、同時に「私の人生の目標」と一致していたが、成熟社会になると「社会の発展」の共通目標は曖昧なものとなっていき、個々人の「私の人生の目標」は多様化の様相を見せることとなる。

また、成長社会から成熟社会への移行は人々の消費を変動させ、社会の産業構造にも大きな変化をもたらすこととなる。具体的には、少品種大量生産／大量消費から多品種少量生産／個人消費への転換であり、その結果、産業の担い手には「答えを早く導き出す」ことではなく、「新たな答えを創り出す」ことが求められるようになる。この産業界の要求の転換が学歴神話の解体をもたらすことにつながっていく。「答えを早く導き出す」ことの力で選抜／序列化された学歴が、社会的な有用性の指標の一つとして認識されえなくなるからである。この学歴の道具的機能の低下は、学校教育への求心力の低下へとつながっていることも看過できない事実である(新谷, 2008)。

こうした「社会の発展」と「私の成長」の不一致と学歴神話の解体は、成長のレールの個人化を促してしていくこととなる。そのため、従来の教育で成長のために必要なものとして共通提示していた「忍耐・団結・奉仕」の価値観が無力化していくこととなる(田中, 2001)。

喩えて言えば、一つのアリーナにおいて共通種目で競争してきた時代から、多様なアリーナにおいて様々な種目で競争する時代へと移ったのである。しかも、その競争は雇用システムや教育環境の変化によって早期化／長期化し、激化を辿ることとなる。共通指標ではない「新たな競争」を今の若者は生き続けているのである。

2-2. 雇用システムの変化

1990年代以降は、経済環境への変化対応により、終身雇用制度・年功序列賃金体系などに代表され、また学校と社会(進路)を結びつける「パイプライン」(山田, 2004)が強固に機能していたような、日本型の雇用システムがリストラクチャリングされていったことも、若者／教育に大きな影響をもたらした。

この雇用システムの変化を導出したのは、バブル崩壊後の「失われた10年」であることは当然であるが、それだけではない。その間に急速に進行したグローバル化により、経済環境の変化が高速化し、グローバル競争が激化したことが大きな背景要因としてある。この中で、高速化した変化への対応感をあげることが企業には求められていくことになる。具体的にはフレキシビリティの向上を目指した人材の流動化である。

このことは、企業が終身雇用した人材を内部で育て上げるという「人材の内部化」(石田, 2008)が揺らいでいくことを意味している。そのため、企業は社員教育の機能を低下させ、高等教育に即戦力(としての可能性の高い)人材に育て上げてから送り出してくることを期待するようになる(玄田, 2005)。この期待は明確に何度も社会に発信されることで、若者の間においてもすぐに「役に立つ」ことを学ぶべきであるという規範が浸透している。しかし、そもそも荻谷(2008)が指摘しているように、これまでの日本の学校教育は、企業での長期的な人材育成を前提とし、そのための訓練能力(trainability)を高めてきたものであり、齟齬をきたしている。昨今の高等教育の改革は、ユニバーサル化(トロウ, 2000)に伴う学生の量的拡充に伴う質的变化と、雇用システムの変化に伴う高等教育への要求の変化の両方への応答として試行錯誤されているものであると言えよう。

この中で、人材の流動化に耐えられるようなポータブルスキルを獲得した個人を育てようとして、従来の集団主義的な教育から、個の強化や個性重視の教育に傾斜していくこととなる。そこでは、他者との協働や助け合いに関する学びが後回しになっていくこととなる。しかし、成果主義を導入している企業であっても、当然グループワークでの仕事が求められる。集団に同化/埋没するような弱い個ではなく、協調/協力できるような「強くしなやかな個」の育成が現代的課題となっている。

なお、青島(2008)は「個」に傾斜した教育の結果、「個性の尊重→個の重視→個の責任」という図式で、企業も学校も教育の責任を放棄し、個人の自己責任としかねない危険性を指摘している。「パイプライン」からの漏れも多くなっている現況下であって、こうした動きに抗い、社会全体で教育の責任を分かち持つことが求められていることは、ここで確認しておきたい。

2-3. 教育における新自由主義の展開

1981年には、第二次臨時行政調査会(土光臨調)が発足し、日本において「小さな政府」路線が始まることとなる。この路線が社会における市場原理の全面展開を促すという「新自由主義」の台頭を招くこととなる。教育においては1984年に発足した臨時教育審議会(臨教審)が新自由主義的な教育改革路線の発端となる(荻谷, 2008)。

この新自由主義の台頭/展開は、それまでの社会システムの多くに大きな変化をもたらすこととなるが、教育もまた例外ではない。教育がサービス産業と化していくことになることは、格差社会の進行にもつながっていくが、学校と保護者の関係に大きな変化をもたらすこととなる。

保護者が消費者としての卓越した眼力を有さない中で、市場原理が展開されれば、学校教育の「よさ」の判断は表層的/短期的になっていくことになる。そもそも教育はその性質上、表層的/短期間に判断できない「よさ」が多い故に現在進行形で混乱をもたらしている。また上記の個の強化の教育への傾斜傾向の中では、自らの子どもの何がどのように強化されていったのかへの関心が高まっていき、その説明責任を求められることになる。このようにして、学校と保護者の関係は消費者/提供者として緊張関係化が進んでいくのである。

しかも、校内暴力や不登校、いじめなどの教育問題が表出した1980年代に学校生活を過ごした世代の保護者には、根深い学校不信がある。また、大学のユニバーサル化の結果、保護者が高学歴化し、

過去には地域で数少ない高学歴者として存していた教員の地位は相対的に低下する中で、学校と保護者の関係は、消費者たる保護者が不信感をもって捉えるということになる。しかも、学校不信が高まる中で、アイロニカルにも、地域教育や家庭教育の脆弱化に伴う学校教育への依存もまた高まっていき、学校は常に完全に充足されることのない期待に応えることとなる。この環境下においては、教員は多くの場合、誉められることが少なくなっていく。常に「もっと」の要求にさらされ、自信を形成しにくくなっていく。

こうした教員の不安を更に促進するのが、新自由主義の展開によって生起する子どもの変化である。アリエス（1980）が明らかとしたように、「子ども」という概念の誕生は、学校における「教育主体」としての社会化（socialization）の特別化と関係している。しかし、内田（2007）が指摘しているように、新自由主義が社会全体を覆い尽くす中で、子どもは就学以前から「消費主体」としての社会化がなされている。また、広田（2008a）が青年から大人への移行期の変化を歴史比較した研究から、現代の若者について、労働世界への参入が遅くなっていつているにも関わらず、若者文化の消費者としての参入は早まる傾向を指摘し、消費主体としての成長が早いことを現代的特徴としている。消費主体として早くに目覚め、そして成長が早いことによって、若者も保護者と同様に（保護者の影響も受けて）学校や教員に消費者として関わるのが基本モードとなる。学校空間は脱聖域化し、社会／人生で役に立つかどうかの眼力も十分に持ち合わせていないのにも関わらず、教員の指導を子どもが吟味しており、また、その子どもの吟味を押し返す自信が教員にもないということが相互に作用し、悪循環のスパイラルが起きていると考えられる。

新自由主義の展開と学歴神話の解体とはあいまって、「とりあえず、教員の言われたことをやってみる」が教育において作動しなくなっていきにくくなっている。しかし、制度としては、学校教育制度は厳然と存在しており、そこで若者に「学びへのあきらめ」と「こなす戦術」を見て取ることができると。提供される教育について役に立つのかどうかを吟味し、また、役に立つ学びを探索するが、当然その確信は得られず、結局何をすればいいかが分からないため、「学び」に対する深い諦めが底流に流れてしまう。それは教員自身にも、その確信がないことも影響していることは言うまでもない。だからこそ、学びに対して本気で取り組まずに「こなす」ことでスルーしようとするのである。

新自由主義が惹き起こした軋みに対して、現在問い直しがなされているが、現在進行形で進む以上の動きは成熟社会への移行や雇用システムの変化等の社会システム全体の動向を踏まえれば、不可避な部分もある。その現実を見据えて、青少年支援者はユースワークのあり方を考えていくべきであろう。

特に「学びへのあきらめ」と「こなす」をどう乗り越えるかは、教育の根本的な空洞化をもたらすものであり、喫緊かつ重要な課題である。フレイレ（1979）の議論を援用すれば、従来の教育は、お金をいつか使うために銀行に貯蓄していくように、知識をいつか役に立つ「かもしれない」と蓄積させていく「銀行型教育（Banking Education）」であったと言えるが、これは既に失効している。フレイレがオルタナティブとして示している「問題提起型教育（Problem Posing Education）」など、新たな学びのスタイルへの革新が必要であろう。

3. 生きる意味／方向性の獲得と承認空間

3-1. なぜ「若者と承認」か？

ここまで論じてきた現代社会の変容を踏まえて、これからのユースワークに関する議論を深めていく際に「承認」という視角からアプローチしていきたい。

私たちは、他者とのつながりの中で自らが必要とされ、また認められていく「承認」があつて、社会における自己の存在意義を確かめることができる。自らのアイデンティティを模索／構築していく若者にとって、「承認されること」は自らの「生きる意味」を見だし、また、自らの「生きる方向性」を得て、社会に踏み出していく上で必要不可欠であり、極めて重要なものである。

しかし、現代社会の変容は若者の承認に大きな変化をもたらしている。承認を巡る変化は、若者のありようを変えていつている。市場原理が社会全面で浸透／展開されていつている流れの中で、私たちは「個」として競争し、他者よりも優位に立つことを常に確認することを求められている。このように競争が全面展開される中、部分的な承認のみが供給され、全人格的な承認を得ることは困難化している（例えば、君は〇〇はできるけど、××はできないと条件がつく）。それは深層構造において、他者とのつながりが断片化／断絶化しているという点で「生きる意味」（上田, 2005）を確かめにくくなっている。

この社会において、若者が社会の新たなリーダーとして自覚していくためには、自覚／自信の形成をもたらす適切な承認が必要である。それはどのようなものであるかを考えていきたい。

3-2. 確かな承認の枯渇

大澤ほか（2008）は、若者の承認空間の現況について、「多様化／分散化」と「市場化」をその特徴として示している。

既述の通り、現代の若者は労働世界への参入が遅くなっているが、そのことは、労働を通じた自己実現やアイデンティティ形成を遅らせることとなり、アイデンティティの源泉として労働ではなく、若者文化が取って代わっている（広田, 2008a）。しかし、宮台（2000）が指摘しているように若者文化は「島宇宙化」している。その島宇宙の中で自己を承認され、アイデンティティが形成されていくこととなる。

また、現代の若者の友人関係構築の特徴に、一人の人間が複数の顔を持って、他者との関係を様々な相手／状況ごとに切り替えていく「フリッピング志向」（辻, 1999）が挙げられるが、ここで特筆すべきことは、その複数の顔同士の一貫性を保持しない、統合することを求めていることである。このようなリキッドなものとしての自己のありようを浅野（2008）は多元的自己と呼んでいる。多元的自己を持つ若者は、その顔ごとに承認を得ることになる。

これには、メディアの発達やモビリティの向上に伴う、人間関係の選択可能性の広がり背景があるが、承認空間の多様化／分散化には当然、逆機能もある。選択不能な人間関係における関係性構築の経験がないことは、自分の価値判断基準と高いレベルでの一致しない他者に対する寛容性の低下を

招く可能性があるが、実際の社会関係は全てにおいて選り好みすることはできない。若者から大人へのスムーズな移行にあたっては、選択不能な関係性におけるアイデンティティ形成の場の提供も必要であろう。

また、若者の承認空間は多様化／分散化のみならず、市場化している。承認空間の市場化とは、承認空間間において市場価値の優劣を認め、より高い価値の承認を志向する傾向をさす。多様化／分散化された、小さな承認空間での承認では、社会を生き抜いていく個の強さに関する確からしさが保障されない。個別の承認空間内の承認の一般通用性にどこか疑念を有しているということである。しかし、個々の承認空間は断片化しており、承認空間間での相互関係も相互リスペクトも低調である（大澤ほか, 2008）。つまり、結局は自らが得ている承認の市場価値が定まりきらないまま、定位せざるを得なくなるということである。

こうした中であって、個の競争を凶ろうとすれば、「確かな承認」の実感のないまま、自分は他者よりもこれはできるのだとやや無理に差異を強調していく中で、自分で自分に他者よりも優位の承認を得られると（強がって）言い聞かせる必要性が出てくる。ここに、根拠のない過剰な自信が形成されていくのである。しかし、この他者との無理な差異化や無根拠な自信の形成には、本人が最も確からしさが無いことを承知している。故に、確からしきの獲得を希求し、インターンシップやリーダー体験などの各種活動に積極的に参加していくのである。この「確かな承認」は、ピア関係では十分に提供され得ないものである。若者にとって市場価値が高いと確信できる大人からの承認である必要がある。では、承認付与を若者から求められる大人が若者に継続的にコミットしながら、何ができているか／いないかを適切に承認し、フィードバックする環境が身近にあるかと言えば、希少である。

寧ろ、教育における新自由主義が展開される中、大人から「消費者」として付き合われている若者に対しては、サービスとして「テキトーな承認」が乱発されている傾向が否めない。消費者を叱咤激励するサービス提供者がいないようにである。例えば、学習場面において若者が何か「分からない」と遭遇した際、そのことを直視させず、「分かっていること」を評価／承認し、分かっていることを調べさせたり、自分で考えさせたりするファシリテートを行わないようなことがある。「できていない」と正対することなく、自己の確からしさを獲得することは不可能である。しかし、それがサービス産業化の誤った理解により、起こっているところもある。現代の若者は「確かな承認」が枯渇していると言えよう。

現代社会において一般に通用する「確かな承認」を調達する際、求められる力を本田（2005）は「ポスト近代型能力」と呼んでいる。ポスト近代型能力の代表例は、コミュニケーション能力であるが、その他にはネットワーク形成力や創造性などが挙げられる。ポスト近代型能力は、習得の仕方が不明瞭であり、獲得していることを確認する方法もまた曖昧であることに一つの特徴がある。習得にあたっては何かの体験活動が必要であることは考えられているが、どのような体験が必要かの議論は不十分なまま、何かしらの「体験すること」が先行している。例えば、自然体験活動におけるリーダー体験といっても内実は科学的根拠に基づいて精緻に検討されているとは言いがたい。また、能力獲得の確認にあたっては、何をしたのかという過去の体験でのパフォーマンスで計られることが多く、その

実を見ないままの「体験のリスト」も一定の価値を持ってしまっている。「何をする（した）のか」ではなく「どのようにする（した）のか」へと承認の方法を移行させていくことが、承認の確からしさを高めていくためには必要であろう。

3-3. 他者の承認からの逃避

ここまで、自己の生きる意味／方向性の定位における「他者からの承認」の必要性／重要性を論じてきたが、他者からの承認には二義性がある（阿部, 2008）。自分らしさを見いだしたり、築き上げていったりするために他者からの承認は確かに必要不可欠である。しかし、他者の承認（まなざし）を気にすることで、自分らしさの構築や発揮を抑制することもある。つまり、他者からの承認が、自分らしくあることを妨げることにもなるのである。

しかも、現代の若者の友人関係は、土井（2008）が「友だち地獄」とまで論じるほどに、他者のまなざしに対する気遣いが徹底され、相互牽制的に関係が編まれている。最近、若者の間で「KY（空気読めない）」という言葉が流布したことがシンボリックに指し示すように、自分らしさの発揮の仕方を誤れば、承認されないことへの恐怖を、現代の若者は常に強く抱えていると言える。このようになると、他者からの承認を得て、自分らしさを発見／構築するために何かを成すのではなく、他者から否認されないように何も成さないという事態が起こってしまう。何かしらの「失敗」を否認リスクと捉えていることに他ならない。故に、「できない」という事態に陥った際、自らの責任とせず、周囲環境に理由を求めて説明する若者が増えているのである。失敗を私の否認ではなく、環境の否認へとスライドさせる言説戦略である。

たとえ失敗したとしても、他者から否認されることはないと思える信頼関係の構築が望まれるのであるが、そのためには積極的な自己開示に基づく相互理解が求められる。しかし、開示した自己を受容してもらえない信頼関係がなければ、積極的に自己を開示することはない（福重, 2006）。承認を相互に成し合えるような関係性を構築するにあたって、この矛盾は常に内包されたものである。ここで否認へのリスク回避を最優先にしてしまえば、自ずと自己に関するメッセージは減じていき、ベタなネタに関する表層的メッセージが中心を占めることとなり、また、他者の反応の先読みが可能な狭い世界へと内閉化し、不作為が横行することとなる。

他者の承認からの逃避は、自己の確立を先送りすることとなる。そうした事態に陥らないようにすることは、大きな現代的課題であろう。

3-4. これからの承認空間のデザイン

それでは、どのような承認空間のデザインが求められているのであろうか。本稿では、幾つかの方向性を指し示したい。その時のキーワードは「ぐらつき」と「多様な大人／多様な軸」である。

まず「ぐらつき」の場であるが、現在の自己を「ぐらつかせ」、確かな自己をつかみ直す承認空間が必要であろう。承認とは決して、受容に留まるものではない。関係性における自己の位置を正確につかむためには、既述の通り「できていないこと」と正対することもまた重要である。その際、自己を

ぐらつかせられるようなフィードバックがなされるためには、若者が「こなす」モードではやり過ごすことのできないハードな環境での体験で身を賭してもらいようにすべきであろう。そして、ハードな環境下での自己との対話を促すために、フィードバックの場面では「説く」のではなく「問う」ことを重んじるべきであろう。その際、失敗を通じた自己否認とならないよう、指導者は絶対的な信頼を寄せつつ、「できごと」ではなく「学び」に意識を焦点化させていくことが求められる。

次に「多様な大人／多様な軸」による承認についてである。現代の若者の承認空間は多様化／分散化しているとはいえ、基本的にそれは水平的な広がりではない。垂直的な多様性は不十分であることが多い。巡（1997）は「子どもの発達のための三つの推進力（プロペラ）」として、タテ型集団／ヨコ型集団／ナナメ型集団の三つの集団との関わりの必要性を指摘した。タテ型集団は家族、ヨコ型集団は友人集団、ナナメ型集団は家族以外の大人集団を指している。ヨコのつながりの拡張は、承認の軸の多様性は限定的であると思われるが、ナナメの位置にいる（一括りにできないような）多様な大人とのつながりの拡張は、多様な承認の軸の発見となる。しかも、一定の社会生活を経た大人からの承認は、ヨコ型集団にはない、社会的通用性に対する「確からしさ」をもたらすことにもなる。

しかし、藤田（1998）が「分節型社会」という言葉で表現した通り、大人と若者の生活時間／生活空間は分節されていており、ナナメどころかタテにおいても大人とのコミュニケーションは貧相化している。そのため、若者が適切なロールモデルを獲得できていないことも少なからずある。だからこそ、多様な承認の軸を有した多様な大人とのコミュニケーションが可能となる承認空間を意図的に設けていくことが求められると言えよう。

また、こうした多様な大人との交わりは、自分が「いかに知らないのか」を知るための「Ex-formation」（原，2005）の機会にもなっていく。私が何を知らないのかを知るためには、多くのことを知る存在と出会うことが必要であるが、それは、一人の博識の大人である必要はない。様々な大人と出会うことで、多くのこと存在を知ることになる。これもまた「ぐらつき」の場である。

これからの承認空間をデザインしていく方向性は、この2つに収斂するものではない。幾つかある方向性の中の2つである。現場での調査研究との往還を通じて、この2つの方向性の妥当性を確認し、また、新たな方向性を見いだしていきたい。

4. ソーシャル・イノベーションのためのユースワークへ

ここまで、現代社会においてユースワークの方法をどのように変えていくかを議論する前提として、社会の変容と若者の変容をまとめてきた。しかし、教育やユースワークを変えていくのは「社会の変化への対応」としてのみ行われるものはない。「望ましい社会の変化の創出」のために行われるものもある。荻谷（2008）も述べている通り、戦後の教育改革はそうであったが、「教育改革→新しい人間形成→社会の変革」という流れもまた、「これから」を構想していく方向性の一つである。

寧ろ、政治／経済／文化の各位相において、20世紀社会とは異なった新しい21世紀社会デザインが求められる中、社会の変容と若者の変容を冷静に捉えながら、惹起すべき社会変革や人間形成を考え、ありかたを考えていくことこそ求められているのではないだろうか。本調査研究においても、21

世紀社会において求められる変革を念頭に置きつつ、育成されるべき新たな人間についての議論を行っている。自然体験活動におけるリーダー体験がそうした変革のための人間形成にどのように寄与するのか／しないのかを吟味していく営みは、まだ端緒についたばかりであり、今後の蓄積が求められるものである。

参考文献

- 青島矢一 (2008) 「全体観の欠如と個性の罨」、青島矢一編『企業の錯誤／教育の迷走-人材育成の「失われた10年」』東信堂、pp.184-195
- 浅野智彦 (2008) 「若者のアイデンティティと友人関係」、広田照幸編『若者文化をどうみるか？-日本社会の現代的変動の中に若者文化を定位する』アドバンテージサーバー、pp.34-61
- 阿部潔 (2008) 「承認と幸福」、高坂健次編『幸福の社会理論』日本放送出版協会、pp.100-111
- アリエス、フィリップ (1980) 『〈子供〉の誕生-アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』杉山光信・杉山恵美子訳、みすず書房
- 石田淳 (2008) 「企業における人材マネジメントの迷走」、青島矢一編『企業の錯誤／教育の迷走』東信堂、pp.72-118
- 上田紀行 (2005) 『生きる意味』岩波新書
- 内田樹 (2007) 『下流志向-学ばない子どもたち、働かない若者たち』講談社
- 大澤真幸・平野啓一郎・本田由紀 (2008) 「〈承認〉を渴望する時代の中で」、大澤真幸編『アキハバラ発-<00年代>への問い』岩波書店、pp.212-234
- 玄田有史 (2005) 『働く過剰-大人のための若者読本』NTT出版
- 斎藤環 (2008) 「若者の匿名化する再帰的コミュニケーション」、大澤真幸編『アキハバラ発』岩波書店、pp.37-43
- 新谷周平 (2008) 「居場所化する学校／若者文化／人間関係-社会の一元化を乗り越えるための課題」、広田照幸編『若者文化をどうみるか？』アドバンテージサーバー、pp.62-92
- 田中治彦 (2001) 「関わりの場利江の『居場所』の構想」、田中治彦編『子ども・若者の居場所の構想-「教育」から「関わりの場」へ』学陽書房、pp.3-12
- 辻大介 (1999) 「若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア」、橋元良明・船津衛編『子ども・青少年とコミュニケーション』北樹出版、pp.11-27
- 土井隆義 (2008) 『友だち地獄-「空気を読む」世代のサバイバル』ちくま新書
- トロウ、マーチン (2000) 『高度情報社会の大学-マスからユニバーサルへ』喜多村和之訳、玉川大学出版会
- 原研哉ゼミ (2005) 『Ex-formation 四万十川』中央公論新社
- 広田照幸 (2008a) 「若者文化をどうみるか」、広田照幸編『若者文化をどうみるか？』アドバンテージサーバー、pp.4-32
- 広田照幸 (2008b) 『21世紀の社会と教育』アドバンテージサーバー
- 福重清 (2006) 「若者の友人関係はどうなっているのか」、浅野智彦編『検証・若者の変貌-失われた10年の後に』勁草書房、pp.115-150

- 藤田英典（1998）「社会化環境の構造変容」、天野郁夫・藤田英典・荻谷剛彦『教育社会学』日本放送出版協会、pp.41-57
- フレイレ，パウロ（1979）『被抑圧者の教育学』小沢有作・楠原彰・柿沼秀雄・伊藤周訳、亜紀書房
- 本田由紀（2005）『多元化する「能力」と日本社会-ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT出版
- 巡静一（1997）「児童問題とのかかわり」、大阪ボランティア協会監修，巡静一・早瀬昇編『基礎から学ぶボランティアの理論と実際』中央法規出版、pp.59-79
- 宮台真司（2000）『まぼろしの郊外-成熟社会を生きる若者たちの行方』朝日文庫
- 山田昌宏（2004）『希望格差社会-「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』筑摩書房
- リオタール，ジャン=フランソワ（1986）『ポスト・モダンの条件-知・社会・言語ゲーム』小林康夫訳、水声社

2009.3.7